類書と成語（三）

―類書の変容と「出藍」の成立―

湯浅邦弘

序言

君子曰く、学は以て已むべからず。青は之を藍より取りて藍より青く、冰は水之を為して水より寒し。

これは、『荀子』勧学篇冒頭の一文である。荀子は、いわゆる天人の分や性悪説を背景に、人間の後天的な作為的努力、すなわち学問による自己改革の重要性を力説する。『荀子』全篇の最初に勧学篇が置かれ、また、その冒頭部が右のような文章によって開始されるのは、そうした荀子の思想を端的に表明するものであると言えよう。

そしてまた、この冒頭部は「出藍の誉れ」の出典としても著名な箇所である。現在、この成語は、「弟子が師よりも優れる」という意味で人口に膾炙している。しかし、右の『荀子』の原文には、「出藍」という表現を導くために必要な「出」という文字は見当たらない。また、その原義も、個人の学問による自己改革の重要性を説くものであって、必ずしも、弟子が師より勝るという師弟関係を説くものではない。

それでは、こうした成語の表現と意味とは、いかなる経緯によって変化し、また固定して行ったのであろうか。筆者は既に、中国の古典を出拠とする成語の誕生について、中国古代の百科全書「類書」との関わりから考察を加えているが、[1] 本稿では、この「出藍」の成立過程を辿りながら、類書と成語との関係、及び類書自体の性格の変化について検討を加えてみることとしたい。

なお、後述のように、この成語は現代中国では「青出于藍」、日本では「出藍（の誉れ）」「青は藍より出でて藍より青し」などの表現が並存しているが、本稿では、この成語を表す場合、便宜上「出藍」と称し、またその出拠とされている『荀子』勧学篇の該当部分を便宜上「勧学」章と呼ぶことにしたい。

一、『荀子』勧学篇の原義

本章では先ず、「出藍」の出拠とされる『荀子』勧学篇冒頭部（「勧学」章）全文の意味を確認し、問題の所在を明らかにしておく。なお、原文

島根大学教育学部紀要（人文・社会科学）第二十八巻　七一頁～九五頁　平成六年十二月

には行論の便宜上、文番号を付記する。

君子曰、学不可以已。青取之於藍而青於藍、冰水為之而寒於水。木直中繩、輮以為輪、其曲中規、雖有槁暴、不復挺者、輮使之然也。故木受繩則直、金就礪則利、君子博学而日参省乎己、則知明而行無過矣。故不登高山、不知天之高也、不臨深谿、不知地之厚也、不聞先王之遺言、不知学問之大也。干越夷貉之子、生而同聲、長而異俗、教使之然也。

君子曰く、学は以て已む可からず。青は之を藍より取りて藍より青く、冰は水之を為して水より寒し。木の直きこと縄に中るも、輮めて以て輪と為せば、其の曲規に中る。槁暴有りと雖も、復た挺びざる者は、輮めたること之をして然らしむるなり。故に木は縄を受くれば則ち直く、金は礪に就けば則ち利く（するど）、君子は博く学びて日々己を参省すれば、則ち知は明かにして行ひ過ち無し。故に高山に登らざれば、天の高きを知らず、深谿に臨まざれば、地の厚きを知らず、先王の遺言を聞かざれば、学問の大なるを知らざるなり。干越夷貉の子、生れながらにして声を同じくするも、長じて俗を異にするは、教へ之をして然らしむるなり。

この「勧学」章の要旨は、冒頭の「学は以て已む可からず」の一語に集約される通り、学問による自己改革の重要性という点にある。これに続く青と藍、氷と水の例、また、木材と金属の例、夷狄の子の例なども、全ては後天的な努力、すなわち学問・教育によって自己変革して行くことの重要性を説くための比喩となっている。この点については既に唐の楊倞が、青と藍、氷と水の比喩に関して「以て学べば則ち才其の本性を過ぐるを喩うるなり」(2)と注する通りである。

ところで、この『荀子』の原文と成語「出藍」とを対比して見た場合、二つの重要な問題点に気付く。第一は、表現の相違である。この原文の中には「出藍」という表現が成立するために必要な「藍」という文字は存在するが、「出」という文字は見当たらない。また第二は、意味の相違である。『荀子』勧学篇の主旨は、あくまで個々人にとっての学問の重要性であって、その結果としての師弟関係の逆転ではない。

では、こうした表現や意味の変化については、従来どのような説明がなされているであろうか。この「出藍」の成立について先ず手掛かりとなるのは、清の翟顥の『通俗篇』の見解である。

青出于藍　［荀子勧学篇］学不可以已。青出于藍而青于藍、冰水為之而寒于水。又［北史李謐伝］青成藍、藍謝青、師何常、在明経。（巻三十草木）

『通俗篇』は右のように、先ず「青出于藍」という見出しを立て、その出典として『荀子』勧学篇（文番号2～4に相当する部分）を引いているが、それに続いて「又」として『北史』(3)李謐伝の一節を引用している。その李謐伝の前後を今少し詳細に取り上げてみよう。

李謐、……少くして学を好み、博く諸経に通じ、百氏を周覧す。初め小学博士孔璠に師事す。数年後、王番還って謐に就きて業を請う。同門生之が為に語りて曰く、青藍に成り、藍に青に謝す。師何ぞ常あらん、明経に在り。(4)

このように、李謐は初め小学博士孔璠に師事して学んでいたが、後に李謐の学問が進み、逆に師の孔璠の方が李謐について学業を受ける有様となった。これを見た門下生たちが、その師弟関係の逆転を「青藍に成り、藍青に謝す」と語り合ったのである。

つまり、『通俗篇』は、「青出于藍」の出典を『荀子』勧学篇であるとすると同時に、勧学篇の主旨が成語「青出于藍」の意味に合致しないことにも気付き、その意味に直結する用例として右の李謐伝の存在を指摘するのである。後述のように、現行の故事成語辞典類に於ても、転義の存在を指摘する辞典では、その出典として『荀子』勧学篇と共にこの李謐伝を掲げる場合が多い。[5]

それでは、この李謐伝の存在によって、「出藍」成立の謎は全て解けたと言えるのであろうか。確かに、この李謐伝の記載は、「勧学」章の原義よりは、むしろ「弟子が師よりも優れる」という師弟関係に着眼するものであり、現行の成語「出藍」の意味に合致する用例であると言えよう。

しかしながら、なお問題は残る。第一に、この用例でもやはり、「青出于藍」「出藍」「青は藍より出でて藍より青し」等という成語の構成要素である「出」の文字は見当たらない。「出」はどこから来たのであろうか。

第二に、この李謐伝の用例のみで、「勧学」章の原義が一気に変化したという状況を想定し得るであろうか。確かに、この「勧学」章を踏まえたと思われる表現は、後の詩文にも多く読み込まれて行くが、後述のように、それらは必ずしも李謐伝のような意味で統一的に使用されている訳ではない。僅か李謐伝の用例一例によって「勧学」章の原義が一変してしまったと推測するのは、やや早計であるように思われる。

第三は、『荀子』全体に於ける「勧学」章の位置の問題である。「出藍」は『荀子』全篇の最初の篇、しかもその冒頭部の一文に基づく成語であることから、意味の変容はそれほど容易には起こらなかったのではないかとも推測される。前稿で検討した「杞憂」や「沈魚落雁」は、『列子』や『荘子』という道家の文献の、しかもその篇の半ばに位置していた。従って、該当部分が他の文献に節略して引用され行く過程で、転義が発生する可能性は十分に考えられた。しかし、著名な儒家の文献、しかもその巻頭の一文が、果たして容易にその意味を変容させ得るであろうか。「公冶長論語」「須磨源氏」などの言葉があるように、一般の読書人にとって、古典を巻末まで精読するのはなかなかに困難である。しかし、逆に言えば、『論語』でも公冶長篇辺りまでは一応読まれるのが通常であり、特にその巻頭の部分ともなれば、読者に熟知されている可能性が高く、意味がそれほど容易に変容するとは考えられないのである。

以上三つの疑問点の内、第一の点に関しては、王念孫『読書雑志』に次のような見解が提示されている。王念孫は、宋本の「青取之於藍」という部分を「青出之藍」に作る元刻本があったことを指摘し、それは、宋の王応麟『困学紀聞』に引かれた建本に基づくものであると説く。また、『芸文類聚』『太平御覧』等の類書に採録される引用文も「青出於藍」となっていることから、『荀子』の原文は本来「青出於藍」となっていたのだと主張する。

しかし、これに対して王先謙『荀子集解』は、本文を宋本に従って「青取之於藍」と確定した上で、前漢の『大戴礼記』が「青取之於藍」に作り、唐の『群書治要』も「青取之藍」に作ることから、右の王念孫の説には疑問を呈している。

このように、「出藍」の出拠とされる『荀子』の本文には、その異同をめぐる問題があるが、いずれにしても、成語「出藍」は、その揺れている本文の内、「出」に作るテキストに関係があるらしいことは推測さ

れる。特に王念孫の説は、現行の『荀子』注釈書や辞典類にもそのまま継承されており、「出藍（の誉れ）」という表現の直接的な典拠をこの元刻本の記載に求める場合も多い。[6]

しかしながら、「出藍」の起源が元刻本の「青出之藍」であるか否かについては、やはり疑問が残る。何故なら、「青出之藍」という記載も、元刻本に初めて登場したのではなく、逆に『荀子』以外の他文献の用例に、むしろ元刻本の側が牽引されて、本来の「取」を「出」に改めたという可能性も否定できないからである。もしそうであるとすれば、意味の変容の問題は別としても、表現の変容すなわち「出」の起源は元刻本を遥かに遡る可能性も生じてくるのである。

そこで、この問題を含め、以上三つの問題点を念頭に置きながら、次に、「勧学」章が他の詩文にどのように読み込まれているか、検討してみよう。

二、詩文の用例

「勧学」章は、『荀子』勧学篇冒頭部に位置する著名な一節であり、後世、多くの詩文にも読み込まれて行く。清の『通俗篇』や現行の故事成語辞典類によれば、「出藍」の意味の変化は、『北史』李謐伝の用例に基づくとされるが、一方、高名な文人の詩や文章内での用例も、その表現や意味の変容を齎す大きな要因になる可能性がある。「出藍」成立に於ける李謐伝の意義を確認する上でも、これら詩文の用例を検討してみる必要があろう。

先ず、前漢の『淮南子』には、次のような文が見える。

今涅を以て緇を染むれば則ち涅よりも黒く、藍を以て青を染むれば則ち藍よりも青し。涅は緇に非ず、青は藍に非ざれば、茲に其の母に遇ふと雖も、能く復た化する無きのみ。是れ何となれば則ち以て其の転じて益々薄きに諭うるなり。何ぞ況んや夫の未だ始めより涅藍の増化する者有らざるをや。（俶真訓）[7]

これは、必ずしも『荀子』勧学篇を引用したもの或いは踏まえたものとは断定できないが、やはり青と藍とを比喩に使用している。しかしその意味は、『荀子』とは全く異なっている。『淮南子』は、藍で染めた青は藍より青くなるが、転化した青は既に本源たる藍そのものではなくなり、「其の母」たる藍に出会っても二度と復帰できなくなると説く。つまり、ここでは、藍によって染色された青が元の藍より青くなるというのは、ある物が世界の本源から離れて行くさまを譬えたものであり、『淮南子』自身が記す通り、「其の転じて益々薄きに諭」えた、むしろ悪い意味なのである。これは、「勧学」章が、自己改革、師弟関係いずれにしろ、元のものより優れるという良い意味を表していたのとは正反対である。

このことは、前漢当時、この青と藍の比喩は、学派の相違を越えて使用されながらも、その意味は「勧学」に固定していなかった、或いは既に前漢時代に於て意味の変化の萌芽が見られた可能性を示唆していると言えよう。

次に、同じく前漢の『大戴礼記』には次のような用例が見える。

君子曰く、学は以て已むべからず。青は之を藍より取りて藍より青く、水は則ち冰を為して水より寒し。（勧学篇）[8]

これは、篇名の「勧学」からその内容に至るまで、『荀子』勧学篇を

忠実に踏襲したと言ってもよい一篇であり、青・藍の比喩についても右の如く、『荀子』と同工異曲である。特に「青取之於藍」の部分は、宋本『荀子』の記載と全く同じである。『荀子』と『大戴礼記』とは同じ儒家の文献、しかも礼学の伝統という点でも極めて類似した性格の文献でもあり、当然と言えば当然であるが、ここでは、『荀子』勧学篇の原義・表現が、正しく継承されていることが分かる。

また、『史記』の褚少孫三王世家には次のようにある。

伝に曰く、青采は藍より出でて質藍より青しとは、教へ然らしむるなり。[9]

これは、武帝時代の斉王の教化の様を説く文脈上で引用されたものである。「教へ然らしむるなり」という主旨は「勧学」章と同様であり、明らかに『荀子』を踏まえたものであると言えよう。但し、「出於藍」という表現は、宋本『荀子』の「取之於藍」とは異なり、後の「出藍」に連なる一要素を既に備えていると思われる。

また、後漢・桓譚の『新論』には次のような用例が見える。

性情未だ錬らざれば、則ち神明発せず。諸を金木に譬うれば、金の性は水を苞し、水の性は火を蔵す。故に金を錬れば則ち水出で、木を鑽すれば而ち火生ず。人能く学に務めて其の性を鑽錬すれば、則ち木慧発す。青藍より出でて藍より青きは、染然らしむるなり。氷水より生じて水より冷たきは、寒然らしむるなり。鏡金より出でて金より明るきは、瑩然らしむるなり。戎夷の子、生れながらにして声を同じうするも、長じて語を異にするは、教然らしむるなり。[10]
(崇学篇)

これも、篇名の「崇学」から推測される通り、『荀子』勧学篇の言葉を敷衍しながら学問の重要性を主張する内容となっている。「青出於藍而青於藍、染使然也」とある如く、青と藍も、直後の氷と水、鏡と金の例などと共に、『荀子』勧学篇の主旨と同様、後天的な「鑽錬」の重要性を説く比喩として使用されている。明らかに「勧学」章の原義を踏まえた一節であるが、右の三王世家同様、「青出於藍」に作っている点は、「出藍」という表現の成立を考える際に重要であると思われる。

また、これと同様なのが、北斉・劉昼の『劉子』の用例である。その崇学篇に、「青は藍より出でて藍より勝るは、染然らしむるなり」[11]とある。これも「崇学」という篇名から明らかなように、学問の重要性を説くものであり、青・藍の比喩を『荀子』や『大戴礼記』などと同様の文脈で使用している。但し、その表現については、二つの重要な点を指摘し得る。一つは、『史記』『新論』同様、「青出於藍」と「出」の字を使用していることであり、今一つは、これに続く表現を微妙に変えて「勝於藍」としている点である。この「勝」という表記は、大意に大きな変容を迫るものではないが、後の師弟関係としての「出藍」の意味を彷彿とさせる重要な記載であると思われる。

以上は『荀子』勧学篇と同様、学問による自己改革を説く比喩として使用する例であるが、一方これに対して、『北史』李謐伝に見られたような師弟関係の比喩として使用するものも多い。先ず、唐・張彦遠の『歴代名画記』には、「各々師資有り、遞(たが)ひに相倣效す。或は自から戸牖を開き、或は未だ門墻に及ばず、或は青藍より出で、或は冰水より寒し。精粗別有り」(巻二、叙師資伝授南北時代)[12]という用例が見え、ここでは生徒が先生を凌ぐという意味で使用されている。また、宋・胡仔が黄庭堅を評した「山谷」の中に、「東坡、徐浩の書に学び、山谷(黄庭堅)、

沈傳師の書に学ぶ。皆青藍に過ぐる者なり」（『苕渓漁隠叢話後集』[13]）とあるが、これも明らかに、弟子（蘇東坡および黄庭堅）が元の師を凌ぐという文脈での使用例である。更に、元・夏文彦は「廉布……山水を画き、尤も枯木叢竹・奇石松柏に工なり、本東坡に学び、青藍に出づ」（『図絵宝鑑』巻四、宋南渡後[14]）と絵画に於て廉布（字は宜仲）が嘗て学んだ蘇東坡より優れたという意味で「青出于藍」と表現し、金の元好問は、密子瑜が詩書の学に於てその師を越えたことを評し「少くして日々詩を朱巨観に学び、書を任君謨に学び、遂に出藍の誉れ有り」（『中州集』巻五、密国公璹[15]）と述べた。

このように、「出藍」は李謐伝の用例同様、師弟関係逆転の比喩として使用される場合が確かにあり、またその表現も宋本『荀子』の「取」ではなく、「出」としているものが多い[16]。それではやはり、『通俗篇』の指摘通り、李謐伝を顕著な例として、「出藍」の意味は大きく転換してしまったのであろうか。

ところが、「出藍」に関しては、更にこれ以外の様々な用例が見え、決して師弟関係を表す比喩として固定的に使用されている訳ではないことが分かる。それらを、右の諸例を含めて分類すると、概ね五種に上ると思われる。

第一は、先の『大戴礼記』『劉子』等の例であり、青・藍の比喩を『荀子』勧学篇の原義に沿って使用する例である。

第二は、右の張彦遠や胡仔などの例であり、李謐伝同様、弟子が師より勝るという師弟関係の比喩として使用するものである。

第三は、後人が前人を凌ぐという意味を表す例である。例えば、梁・鍾嶸『詩品』には、「徳璋封谿に生れ、而して文彫飾を為し、藍より青し[17]」とあり、また、唐・包何の詩に「誰か道ふ衆賢能く体を継ぐと、須らく知るべし箇々藍に出づるを」（「相里使君第七男生日[18]」）などとある。これらは、右の第二の分類の派生とも言えるが、単に師弟関係に限定せず、子供と親との関係など、広く後者が前者を越えるという意味で使用している。また、これらの表現には、「青於藍」「出於藍」などのような省略化が見られ、この点、右の諸例が「青出於藍」「青過於藍」など典故の表現に比較的忠実であったのとの相違点になっている。

第四は、後のもの（こと）が前のもの（こと）を越えるという意味を表す例である。第三までの例が人間あるいは人間関係の比喩であったのに対して、この例は、人間以外のもの（こと）を譬えている。例えば、唐・白居易の「賦賦」には次のようにある。

賦とは、古詩の流なり。始め荀宋（荀子と宋玉）に草創し、漸く賈馬（賈誼と司馬相如）に恢張す。氷は水より生じ、初め本を典墳（五典、三墳）に変ず。青藍より出でて、復た華を風雅（『詩経』の風と雅）より増す。而る後に四声を諧へ、八病を祛ひ、信に斯文の美なる者なり[19]。

これは、賦の成立について述べたものであり、賦が古代の詩に源を発し、荀子・宋玉に始まって賈誼・司馬相如に発展したと、その来歴を語るが、青が藍より出づる如く、やがて賦は詩の「風」「雅」より華を増したと説く。これは、氷・水と青・藍との使用順序を逆転させているものの、明らかに「勧学」章を踏まえた用例であると思われる。但し、青・藍の比喩は元のものより秀でるさまを譬えており、ここでは、賦とその源流たる詩との関係を譬えるものとなっている。意味的には、学問による自己改革というよりは、弟子が師を越えるという師弟関係に近く、表

記も「青出於藍」となっているが、いずれにしても、人間以外のもの（賦と詩）の関係を表す点は、これまでの用例とはやや異なると言えよう。

最後に第五として、同類の他のものより秀でているという意味での用例を挙げることができる。例えば、宋・蘇軾「与朱康叔書」には、「天覚出藍の作、本以て公家の宝と為るも、公乃ち軽んじて以て人に与ふ」[20]とあり、ここでは、同類の他のものより優れているという意味で使用されている。これに類するものとしては、明・楊慎の『丹鉛雑録』に、『五代史』を評して「李蒼卿公の五代史を謂ふ、順宗実録に比して出藍の色有るに似たり」（五代史学史記）[21]とあり、ここでも、同類の他のもの（史書）より優れているという意味で「出藍の色有り」と表現されている。[22]

以上、『荀子』勧学篇を踏まえていると思われる用例を検討してきたが、再度それらをまとめると、①学問による自己改革という「勧学」章の原義をほぼ忠実に踏まえているもの、②『北史』李謐伝同様、弟子が師に勝るという意味で使用しているもの、③師弟関係に限定せず、広く後人が前人を凌ぐという意味で使用するもの、④（人間以外の）後のもの（こと）が前のもの（こと）を越えるという意味で使用するもの、⑤同類の他のものより抜きんでて優れているという意味で使用するもの、などに分類することができる。[23]

このように、これら詩文の用例は、必ずしも弟子が師を凌ぐという意味で統一されている訳ではなく、むしろ多様な展開を示していると言えるであろう。従って、『北史』李謐伝の用例は、「勧学」章の転義を考える上での重要な手掛かりであることは確実としても、それのみによって「勧学」章の原義が一変し固定してしまったという状況を想定するのはやや困難であると考えられる。特に、詩では、古典の語句や故事を踏まえながらも、それを自らの詩の中へいかに新鮮に取り込んで行くかに、その価値が問われているとも言える。従って、詩の用例が全く同一の意味で固定していないのは、むしろ当然の現象とも考えられる。

但し、①の用例が比較的古い文献に見えるのに対して、②～⑤の用例が比較的新しい文献に多く見えることから、やはり李謐伝の頃には一旦②のような転義が大勢を占めた後、更に、③～⑤のような多様な用例が派生したという可能性も考えられる。しかし、仮にそうだとしても、やはり『荀子』冒頭部の原義がどのようにして李謐伝の如き意味へと大きく変化したのか、また、後の多様な用例がどのようにして成語「出藍」のような意味・表現に統一され、固定して行ったのかは、なお疑問として残る。

そこで次に、いよいよ類書と「出藍」との関係について考察を進めてみることとする。

三、類書と「出藍」

前稿（一）（二）に於て考察した「杞憂」「沈魚落雁」では、それらの成語の成立過程に類書の存在が深く関与していた。類書は、古典の著名な文章を節略しながら引用し、該当項目に分類して配置する。また、その引用文の意味を端的に表す見出し語を立てる場合もある。更には、見出し語を大字で、引用文や出典名を割注として記載するなど、視覚的な工夫を凝らして読者の読解・暗誦・検索等の便を図る場合もあった。こ

うしたテキスト上の視覚的配慮は、有名な古典の文章を簡便に手際よく読者に提供し得ると言える反面、そのことが逆に、引用される古典の側に重大な読みの変容を齎す可能性もあった。

「杞憂」の場合、『列子』天瑞篇の該当部分が類書の「天」の部に大幅な後略を施されつつ引用されたため、原文に存在した「地」の要素、また肝心の列子の思想が見事に欠落することとなった。その結果、成語「杞憂」は、むかし杞の国に天が落ちてくることを憂えた人がいたという、単なる取り越し苦労の意味と理解されるに至った。[24]

また、「沈魚落雁」の場合、『荘子』斉物論篇の原文では、毛嬙麗姫のような美人を見ても、魚は危険を感じて水底深く潜り込み、鳥は空高く飛び去ってしまうと記されており、そこでは、人間の価値判断が相対的なものに過ぎず、毛嬙麗姫も絶対的な「美」人ではない点に主眼が置かれている。ところが、この一節が類書に採録される際、多くは「美婦人」の項に分類され、また、同時に採録された他文献の用例との交響によって、成語「沈魚落雁」は、飛ぶ鳥も落とす程の絶世の美女、という意味で理解されるに至る。[25]

こうした類書と成語との関わりは、むろん各々の場合によってその事情を異にするであろうが、成語の成立過程に類書というテキストが少なからぬ影響を与えていることは確実のようである。それでは、「出藍」の場合、類書との関わりは如何なるものであったろうか。そこで、「杞憂」「沈魚落雁」同様、代表的な類書の採録状況を、その分類項目・見出し語・引用文・引用範囲などの観点から検討してみよう。[26]

表1～3に、『芸文類聚』から『古今図書集成』まで歴代の代表的な類書の採録状況を掲げてみる。表1は、『荀子』勧学篇を出典として掲げるもの、表2は、『北史』李謐伝を出典として提示するもの、表3は、その他の詩文の用例を引用するものである。

第一に、「出藍」が如何なる項目に分類されているか、各表の「分類」欄に示した。この内、表1では「勧学」「従学」「論議」「習学」など「学」に力点を置くものと「藍」とにほぼ二分される。これに対して、表2・3では、「勧学」「従学」等は見えず、「習学」「師弟」「師」など師弟関係を想起させるものと「藍」とに二分される。これらの分類項目の内、「師弟」「師」などは、「勧学」章の転義と深い関わりがあると推測されるものの、歴代の類書が全て「勧学」章を師弟の部に分類している訳ではなく、特に表1の類書群は、むしろ『荀子』勧学篇の原義に忠実な「学」、あるいは原義・転義いずれにも荷担しない「藍」という項目に分類していることが分かる。

第二に、各類書が立てている見出し語を、各表の「見出し語」欄に列挙してみると、表1には「青生於藍而青於藍」「青勝於藍」「青藍寒水」「青成藍」など、表2には「青成藍藍謝青」「李謐青藍」「請業」「語曰青藍」「青成藍」など、表3には「出藍更青」「青出藍」「青成藍」「出于藍」などが見える。これらの見出し語に共通するのは、宋本『荀子』の原文「青取之於藍」をそのままの形では使用していないという点である。原文「青取之於藍」では、青を藍から取り出す主体すなわち人間個人が想定されるのに対して、「出」「勝」等の語を使用するこれらの見出し語は、青が藍から出る、或いは青が藍より勝るという対人関係としての意味をより強調する作用があると言えよう。この傾向は、『荀子』勧学篇を出典とする表1の類書よりも、李謐伝やその他の詩文を典拠・用例として掲げる表2・3の類書に、より顕著である。また、「出藍更青」「青出藍」

という見出し語には、既に「出藍」というまとまりが含まれており、成語「出藍」の成立を考える際に、看過できない点であると思われる。

第三に、各類書の掲げる引用文を、各表の「引用文」および「範囲」欄に掲げてみる。先ず引用範囲であるが、『荀子』勧学篇を出典として提示する表1の類書では、概ね「勧学」章の内の「青取之於藍而青於藍、冰水為之而寒於水」に相当する部分（文番号3・4）を引用している。但し、原文の「君子曰、学不可以已」（文番号1・2）については割愛される場合が多く、僅かに『古今合璧事類備用』と『喩林』が「学不可以已」（文番号2）から引用を開始するのみである。つまり、多くの類書では、「勧学」章の「学不可以已」という主題を、少なくともテキスト上からは欠落させており、このことが、「青取之於藍而青於藍、冰水為之而寒於水」の比喩の部分を「学不可以已」という主題から乖離させる一要因になっていると考えられる。

また、その引用文も、『淵鑑類函』従学の部の引用文以外は、「青出於藍」に作るものがほとんどであり、これも右の見出し語と相俟って、「勧学」章の原義の変容と「出藍」「青出于藍」という表現の成立に、一定の役割を演じていると思われる。

次に、李謐伝を出典として掲げる表2の類書では、多少の異同はあるものの、概ね同様の箇所を引用しており、特に、師弟関係の逆転を語った「青成藍藍謝青、師何常在明経」の部分については皆等しく引用している。そして、この表2の類書では、これらの引用文・出典は、右に検討した分類項目・見出し語と密接な関係にある。この引用文は、師弟関係を想起させる「習学」「師弟」「師」などに分類され、その見出し語も「青成藍藍謝青」「請業」など師弟関係の逆転を強調するものとなっていた。

更に、これら類書の中には、前稿（二）で検討した「沈魚落雁」と同様、テキストの交響現象を指摘し得るものがあり、表2の類書にはとりわけその傾向が顕著である。例えば、『天中記』は、「師弟」の部に「請業」という見出し語を立て、その下に『魏書』李謐伝を引用しているが、その前後にも、「渉師」「乞言」「人倫之表」「師逃」「後進質疑」「十五為師弟」などの見出し語の下、師弟関係にまつわる故事を採録している。また『淵鑑類函』は、「師」の部に「語曰青藍」と「詩云棟梁」とを事対として掲げ、その前後にも、「申公弟子」「韓氏生徒」、「受易東帰」「忘年北面」など師弟に関する事対の見出し語を掲げ、各々関係する故事を引用している。こうしたテキストでは、本来別個のテキストの文章が同一項目の中に再編され、しかも視覚的に近接した部分に連続して併置されることによって、個々のテキストが相互に交響し合い、読者の読みに大きな影響を与えることが予測される。

「沈魚落雁」では、『荘子』斉物論篇の該当部分が、類書の「美婦人」の部に分類され、更に、明らかに美人を意味する他の用例と併置されることによって、類書に引用された『荘子』と他のテキストとの交響が生じ、『荘子』の読みを一定の方向に導いて行く働きをしていた。同様に、この「出藍」の場合も、師弟関係を表す他の引用文と併置されることによって、『荀子』勧学篇の原義よりは李謐伝の転義の方をより強調して読者に伝えることになると考えられるのである。

最後に、第四として、出典の掲示方法も、「出藍」の形成に若干の影響を与えていると思われる。各類書の出典の掲示方法については、各表の「出典掲載」欄に示しておいたが、ここでは具体的に、『芸文類聚』『喩林』『記纂淵海』『淵鑑類函』の採録形態を図1～4で比較してみる。

表1　「出藍」と類書との関係（一）『荀子』勧学篇を出典とするもの

時代	類書名	分類	見出し語	引用文	範囲	出典掲載
	（荀子）	勧学		君子曰、学不可以已、青取之於藍而青於藍、冰水為之而寒於水		
唐	芸文類聚	藍	×	青出於藍而青於藍	3	孫卿子曰…
	白氏六帖	従学	青出於藍而青於藍…	青出於藍而青於藍、氷生於水而寒於水	3〜4	×
	事類賦	地	生於寒水	冰生於水而寒於水	4	荀子*曰…
宋	太平御覧	藍	×	青生於藍而青於藍	3	孫卿子曰…
	記纂淵海	論議	青勝於藍	青出於藍而青於藍、冰生於水而寒於水	3〜4	…荀子*勧学
	全芳備祖集	藍	×	青出於藍	3	…荀子*
	古今合璧事類備用	習学	荀子寒冰	学不可以已、青出於藍而青於藍、冰生於水而寒於水	2〜4	…荀子*
明	喩林	求益	×	学不可以已、青出之於藍而青於藍、冰水為之而寒於水…	2〜14	…荀子*勧学
清	淵鑑類函	従学	青藍寒水	青取於藍而青於藍、冰生於水而寒於水	3〜4	荀子*…
		藍	×	青出於藍而青於藍	3	孫卿子曰…
	古今図書集成	藍・雑録	×	青出於藍而青於藍、冰生於水而寒於水	3〜4	孫卿子…
	佩文韻府		青成藍	青出于藍而青于藍	3	荀子*…

・出典掲載欄の＊印は、割注サイズの記載であることを示す。また、「……出典」は引用文末に出典名が記載してあることを示し、「出典……」は逆に出典名の後に引用文が続くことを示す。以下の表も同じ。

表2　「出藍」と類書との関係（二）李謐伝を出典とするもの

時代	類書名	分類	見出し語	引用文	出典掲載
宋	錦繡萬花谷	習学	青成藍藍謝青	李謐 初 事小学博士龍蟠…門生為之語曰、青成藍藍謝青、師何常在明経	…北*史
	古今合璧事類備用	習学	李謐青藍	李謐 初 事小学博士龍蟠…門生為之語曰、青成藍藍謝青、師何常在明経	…北*史
元	韻府羣玉		青於藍	李謐(a) 初師 小学 孔璠…語曰、青出於藍藍謝青、師何常在明経	…北*史
明	天中記	師弟	請業	李謐…初師事小学博士孔璠…同門生為之語曰、青成藍藍謝青、師何常在明経(b)	…魏*書
清	淵鑑類函	師	語曰青藍	李謐…初師事小学博士孔璠…同門生 語曰、青成藍藍謝青、師何常在明経	志*林…
	古今図書集成	藍・紀事	×	謐…初師事小学博士孔璠…同門生為之語曰、青成藍藍謝青、師何常在明経	北史李謐伝…
	佩文韻府		青成藍	初師 博士孔璠…同門生 語曰、青成藍藍謝青、師何常在明経	北*史李謐伝…

(a) この直前に「青出於藍、而青於藍」あり
(b) この後さらに「里曰孝義云」まで引用

表3 「出藍」と類書との関係（三）その他の詩文を出典とするもの

時代	類書名	分類	見出し語	引用文	出典掲載
宋	古今合璧事類備用別集	藍	青又出青	物有九窮好藍	…呂*温
	分類字錦	師	出藍更青	児已受師学、出藍而更青	王*安石詩…
清	古今図書集成	藍・芸文	青出藍	芳藍滋匹帛	唐・王季友
		藍・芸文	青出藍	物有無窮	呂温
			青成藍	以涅染緇則黒于涅、以藍染青則青于藍	淮*南子…
	佩文韻府		青成藍	山光水色青于藍、芙誇故人指絶境	李*白詩…
			出于藍	誰道衆賢能継体、須知箇箇出于藍	包*何相里使君第七男生日詩…

図1　『芸文類聚』の採録形態

孫卿子曰青出於藍而青於藍

図2　『喩林』の採録形態

学不可以已青出之於藍而青於藍□□……□□荀子勸学

図3　『記纂淵海』の採録形態

青勝於藍

□□□□□……□□□□□

青出於藍而青於藍□□……□□荀子勸学

図4　『淵鑑類函』の採録形態

青藍寒水荀子青取於藍青於藍冰水為之而於冰

図1のように、『芸文類聚』では、出典名→引用文という順で記載されているが、図2の『喩林』では引用文→出典名と、その位置が逆転し、しかも出典名は割注として小字で記されている。また、図3の『記纂淵海』では、見出し語→引用文→出典名の順となり、文字の大きさも、見出し語は大字で別行、引用文も大字、出典名のみ小字となっている。更に、図4の『淵鑑類函』では、見出し語→出典名→引用文の順ながら、大字は見出し語のみで、あとは全て小字で記されている。

このように、類書の歴史の上では、概ね出典名の視覚的地位は低下の一途を辿り、それと入れ代わるかのように、見出し語が台頭して行く。こうした点も、「出藍」が出典から乖離し、成語として確立する過程に、一定の関わりを持っていると考えられる。

以上、類書と「出藍」との関係について検討してきた。ここで、多岐に亙った問題を、表現と意味との二つに分けて整理すると、先ず、「勸学」章の表現の変化と類書の記載とは、密接な関係があると言える。類書の提示する見出し語や引用文は、ほとんどの場合、該当部分を「出」に作っており、これは、先に検討した『新論』『劉子』などと共に、「青出于藍」「出藍」「青は藍より出でて……」という成語の表現を導いていると考えられる。従来、「出藍」の出拠は、元刻本『荀子』の「青出於藍」にあるとされてきたが、詩文の用例や類書の採録状況を勘案すれば、その由来は元刻本を遥かに遡る可能性が高いと考えられる。

次に、「勸学」章の意味の変容については、類書の分類項目、見出し語、引用範囲、引用文とも、確かに、『荀子』勸学篇の読みの変容に何らかの関わりを持つことが判明した。類書は「勸学」章を「師弟」という分類項目に採録する場合があり、また、その見出し語も、意味の変容に関わりがあると思われる「青勝於藍」「青成藍」などが提示されてい

た。また、引用範囲・引用文も、「勧学」の主旨を端的に表明する「学不可以已」が省略され、青・藍、氷・水の比喩の部分のみが採録されていた。これらは確かに、『荀子』を原文で読んだ際とは異なる印象を読者に与えることとなろう。

しかしながら、この意味に関しては、「杞憂」や「沈魚落雁」の例とは異なり、類書が「勧学」章の原義の変化に決定的な影響力を持っていたとは考えにくい。何故なら、表2の類書のように、「出藍」を「師弟」という意味で読者に提供するものも確かにある一方で、むしろ表1の類書のように、依然として『荀子』の原義に忠実に「勧学」という意味で採録する場合が多いからである。つまり、表1の類書は、「勧学」章の意味の変化に際して、むしろその変化を抑止しているとも言えるのである。

このように、類書の歴史の上では、「勧学」章の意味・表現は、確かに揺れを示しながらも、決して李謐伝のような師弟関係としての意味に固定されている訳ではない。これは、前章に於て検討した詩文の用例とも合致する現象であり、「勧学」章は、やはり李謐伝の用例によってその意味を一変させてしまったのではないことが推測される。

それでは、こうした意味・表現の揺れは、どのようにして統一され、成語「出藍」として固定して行ったのであろうか。

四、類書の変容

その最大の要因として想定されるのは、やはり類書である。前章で検討した類書は、『芸文類聚』『太平御覧』『淵鑑類函』など言わば典型的な類書であり、それらも確かに、分類項目・見出し語・引用文などに於て、「出藍」の意味・表現の変化を齎す素地を形成していた。ただ、それらの類書には、成語「出藍」の成立を最終的に決定づける程の要因は見出だせなかった。

ところが、類書の定義は歴代の主要な文献目録の間でも揺れがあり、その定義によっては、表1～3で取り上げたもの以外にも、多くの文献が「類書」に該当することとなる。またこれは、文献目録の定義が曖昧であるというのみではなく、類書自体の性格も多様な展開を見せている点にその原因がある。そして「出藍」の成立は、こうした類書の展開と深い関わりがあるように思われる。

類書の起源は魏の文帝が編纂を命じた『皇覧』であるとされる。仮にこの『皇覧』を基準に考えれば、類書は、本来、皇帝が古典の精華を一書に収録することにより、「武」ではなく「文」の力によって世界を統一せんとした壮大な意図を持つ文献であるとも言える。類似の文献に「叢書」があるが、叢書は複数の単行本をそのまま収集したものであるのに対して、類書は、単行本を一旦ばらばらに分節し、天・地・人という世界の枠組に沿ってそれらを再編する点に特色がある。こうした操作によって、あらゆる古典に記された世界の事物は、皇帝の下に従属することとなるのである。従って、『皇覧』『修文殿御覧』『太平御覧』等の書名から明らかな如く、その読者として想定されるのは、先ず、他ならぬ皇帝自身であった。

但し、こうした壮大な意図はともかく、類書は実質的には、皇帝や側近の詩文創作の資料集として活用され、更に後世の文人の要求に答える形で再版され、更には文人や書肆の手によって、より読者の要求に答え

得る新たな姿へと変貌を遂げて行った。白居易の『白氏六帖』、陸贄の『備挙文言』、張仲素の『詞圃』などはその例である。また、皇帝や文人の手を離れ、広く民間に流布した『免園策府』、縮小版類書とも言うべき『稽瑞』、顔真卿による韻引の『韻海鏡原』など、類書は多様な展開を見せる。更に、その韻引を徹底させた『韻府羣玉』『佩文韻府』、語頭の数字によって見出し語を配列した『小学紺珠』、絵図による解説を施した『三才図会』なども、類書の本来的理念の上に更に読者への現実的配慮を加味した新しい類書であったと言える。

こうした類書の展開が、中国の文化史、特に科挙制度、印刷出版技術の進展、読書人・読書観の変容などと深い関わりがある点については既に前稿（一）で述べた通りであるが、明代以降、そうした状況を背景として、類書は更に新たな様相を見せるに至る。

明・程登吉編『幼学故事瓊林』、宋・胡継宗編『書言故事大全』[27]、明・丘濬編『故事必読成語考』、明・程允升編『雅俗故事読本』などは、そうした新たな類書であり、かつまた現在の故事成語辞典の先駆的存在とも言える文献である。

先ず、『故事必読成語考』を取り上げ、従来の類書と如何なる点が異なるのか、具体的に検討してみよう。『故事必読成語考』は、全体を三十四部に分け、天文・地輿・歳時に始まり、身体・宮室・器用などを経て、人事・疾病死喪・鬼神に終わる。こうした構成は、従来の類書と変わる所がない。また、その分類項目に該当する古典の名言名句を引用するという点も正に類書の形態そのものである。ところが、その引用文は次のようになっている。[28]

氷生于水而寒于水、比学生過于先生、青出于藍而勝于藍、比弟子優于師傅。（師生）[29]

「氷は水より生じて水より寒し」は、学生の先生に過ぐるに比す。

「青藍より出でて藍に勝つ」は、弟子の師傅より優るに比す。

これは、氷・水、青・藍の順序を逆転しながらも、明らかに『荀子』勧学篇を踏まえた記載である。ところが、従来の類書が、その意味や表現の揺れを伴いながらも、飽くまで「勧学」章の原文を引用するのみであったのに対して、ここでは、「氷生于水而寒于水」「青出于藍而勝于藍」という原文の意味を、各々「比学生過于先生」「比弟子優于師傅」と編者が自ら解説しているのである。

それ以前にも、『事類賦』のように、出典を異にする名言名句を、賦の形式を借りて一文のように連続させるものもあったが、各句は飽くまで古典からの引用文であった。また、『冊府元亀』のように、各分類項目の冒頭に、その項目の言わば序文・総論に当たる短文を編者が書き下ろす場合もあった。しかしこれとて、その項目内に採録されている個々の引用文の意味を逐一解説したりはしなかった。これに比べれば、『故事必読成語考』は、従来の類書の枠を大きく一歩踏み出した文献であると言えよう。また、その書名からしても、既に、この文献が当初の類書の理念を離れ、著名な故事・成語を要領よく読者に提供せんと意図して編纂されたことは明らかである。

もっとも、こうした性格を持つ文献としては、既に宋代に、『史記』の中の著名な語句を摘録した洪邁の『史記法語』、同じく『漢書』の語句を採録した『漢雋』などが見える。しかし、それらが、採録対象の文献を『漢書』や『史記』など特定の一書に限定していたのに対して、『故事必読成語考』等は、限定を設けずに広く古典の名言名句を採録し、

外見上は『芸文類聚』『太平御覧』など典型的な類書と近接している点に特色があると言えよう。また、唐の『意林』は、諸子文献の中から著名な語句を摘録し、各々に簡潔な解説を施している点で、やはりこれらの文献の先駆的存在の一つとも考えられる。しかし、『意林』の構成は、諸子の文献単位であって、個々の句を天地人などの枠に沿って再編する類書の理念とは基本的な相違がある。[30] このように、『故事必読成語考』等は、従来の類書に類似しながらも「類書」の概念には収まりきらぬ特異な文献であると言えよう。

そこで、文献目録の上でも、これらの文献の位置付けは決して一様ではない。例えば、『四庫全書総目提要』は右の四書を全く収録していないが、『燕京大学図書館目録初稿類書之部』（鄧嗣禹、燕京大学図書館、一九三五年）は『幼学故事瓊林』を類書の蒙求門に分類して他の三書を収録せず、『京都大学人文科学研究所漢籍目録』（一九五八年）は『書言故事大全』と『故事必読成語考』を類書類の彙考之属に分類して他の二書を収録せず、『国立国会図書館漢籍目録』（一九八七年）は四書全てを類書類に記載している、といった具合である。

ただいずれにしても、こうした新しい類書は、明代以降、印刷技術の進歩や読者層の拡大と相俟って大量に刊行され、多くの読者に新しい読書の形を提供することとなった。つまり、古典を巻頭から順に精読・熟読して行くという読みではなく、古典の精華、とりわけその名言名句を要領よく把握して行くという資料検索的な読みの存在が、こうしたテキストから逆に想定されるのである。

そこで、こうした性格の文献に於て、「勧学」章がどのように記載されているか、右の『故事必読成語考』を含めて表4にまとめてみよう。[31]

表4　故事成語辞典的類書と「出藍」

書名	分類	見出し語	意味解説	出典	引用文
書言故事大全	師儒	青出於藍	学勝於師云青出於藍	荀子	学不可以已、青出於藍而青於藍、氷生於水而寒於水
幼学故事瓊林	師生	×	冰生于水而寒于水、比学生過于先生、青出于藍而勝于藍、謂弟子優于師傅。	荀子*	青出于藍而勝于藍、冰生于水而寒于水
故事必読成語考	師生	×	氷生于水而寒于水、比学生過于先生、青出于藍而勝于藍、比弟子優于師傅。	×	×
雅俗故事読本	師生	×	冰生于水而寒于水、比学生過于先生、青出于藍而勝于藍、謂弟子優于師傅。	荀子*	青出于藍而勝于藍、冰生于水而寒于水

先ず、分類項目であるが、これは「師儒」「師弟」など、明らかに師弟関係を表す項目に分類されている。次に、見出し語であるが、表4で見出し語を立てているのは『書言故事大全』のみであり、そこでは「青出於藍」となっていて、やはり宋本『荀子』の「青取之於藍」を採らず、「出」となっている点に特色がある。また、その引用文の意味解説は、「学、師に勝つを「青藍より出づ」と云う」「弟子、師傅より優るに比す」「弟子、師傅より優るを謂う」などと明らかに師弟関係の逆転の意と説いており、更に『書言故事大全』では、明・陳玩の直解が、割注で「弟子学んで止まざれば師に勝る、亦た是の如きなり」「此の両節末者本に勝るなり」と解説を付加している。また、出典についても、『書言故事大全』が『荀子』と『北史』とを併記する以外は、みな『荀子』と記している。

このように、これら故事成語辞典的類書は、『荀子』勧学篇の青・藍、冰・水の比喩を引用する際、それを先ず「師生」という分類項目で拘束し、更に編者自らの解説によって、その意味を強力に固定する。従来の類書でも、分類項目・見出し語・引用範囲・出典の掲載方法等が読者の読みを規制したり一定の方向に導いたりする場合があった訳であるが、その意味を最終的に読み取るのはやはり読者自身であった。これに対して、これらの故事成語辞典的類書は、より強く、読者の読みを唯一の読みに固定して行くと言えるであろう。

もっとも、第一級の知識人は、こうした文献の記載に関わらず、『荀子』勧学篇の原文や主旨を正しく理解し続けたであろうが、成語の成立は、それら一部の知識人の読み取りのみによって齎される訳ではない。むしろ、古典の原文・原義から乖離した読みが、原典から成語を飛翔させる大きな力になるとも考えられる。そうした意味で、これら故事成語辞典的類書は、『荀子』の原義を尊重する立場から見れば、決して好ましい文献であるとは言い難いものの、逆に、「出藍」を『荀子』から飛翔させ、著名な成語へと押し上げて行く最大の貢献者であったとも言えるのである。

五、類書と故事成語辞典

「杞憂」や「沈魚落雁」の場合、意味や表現の変容は、これら故事成語辞典的類書の出現を待つまでもなく、従来の類書上でかなり進展していた。しかし、「出藍」の場合は、右に検討した通り、類書の歴史の上では、決定的な変容は生じておらず、表1に挙げた類書は、むしろ原義の変容を抑止しているとも言えた。詩文の用例も同様であり、李謐伝の用例が明らかに師弟関係の逆転として捉える一方、依然として原義に忠実な用例、更にそのいずれにも分類し得ない多様な用例が見られた。類書も詩文の用例も、飽くまで、「出藍」登場の素地を提供していたに過ぎないのである。

こうした状況の中で、従来の類書の概念を越える新しい類書が登場し、読書人に新たな読みを提供することとなった。それらが「出藍」の成立に決定的な関わりを持っていたことは、前章に於て検討した通りである。

従って、「出藍」と類書との関係については、二つの概括が可能となるであろう。先ず、表1～3に掲げたような伝統的な類書を「類書」と定義すれば、「杞憂」や「沈魚落雁」の場合とは異なり、類書は「出藍」誕生の素地を提供しているとは言えるものの、「出藍」の成立に決定的

な役割を演じてはおらず、むしろ原義の変容を抑止しているとさえ言える。一方、表4で取り上げた故事成語辞典的類書をも「類書」の範疇に収めれば、やはり「出藍」の成立も、類書の存在と深い関わりがあったと言える。

このように、二種の概括が可能になるという点が、「杞憂」や「沈魚落雁」とは異なる、「出藍」独自の類書との関わり方である。その原因は、先述の如く、「出藍」の出拠が、著名な儒家の文献『荀子』の、更にその冒頭部にあり、意味・表現の変化がそれほど容易には起こらなかったという点に求められるであろう。

さて、故事成語辞典的類書を「類書」と定義するか否かは別として、これらの文献の記載は、「出藍」の成立に深く関与しており、また現行の故事成語辞典・国語辞典の記載にも依然として大きな影響を与えていると思われる。最後に本章では、現行の日本・中国の辞典類を取り上げ、この点について検討してみたい。

先ず、中国の辞典類に於ける見出し語は、『成語典』（繆天華主編、復興書局、一九七一年）や『辞源』（修訂本、辞源修訂組・商務印書館編輯部編、商務印書館香港分館、一九八一年）が「青出於藍」、『漢語典故分類詞典』（《漢語典故分類詞典》編写組、内蒙古人民出版社、一九八九年）が「青出于藍而勝于藍」とする他は、全て「青出于藍」で統一されている。この表記は、古くは、後漢の『新論』に見える他、歴代類書の見出し語や引用文にも見られた通り、『荀子』勧学篇の原文の一部（とされているもの）をそのまま見出し語としたものであり、四字熟語としての安定感もあって固定して行ったものと推測される。

また、その意味については、『国語成語大全』（郭後覚編、中華書局、一九二六年）が「比方学生勝過老師」、『五用成語詞典』（周宏溟編、学林出版社、一九八六年）が「比喩学生超過老師、後人勝過前人」と、転義のみを掲げるのを除けば、『成語典』（繆天華主編、復興書局、一九七一年）が「喩人学習後、才過其本質。後以喩弟子優於師傅」、『中華成語大辞典』（向光忠ほか主編、吉林文史出版社、一九八六年）が「原比喩人通過学習可以増長才干而超過本性。後比喩学生勝過老師或後人勝過前人」、『中国成語大辞典』（王剣引責任編集、上海人民出版社、一九八七年）が「後以「青出于藍」比喩学生超過老師或後人勝過前人」と解説する如く、『荀子』勧学篇の原義と、李謐伝に代表される転義との両者について概ね解説している。但し、その経緯や理由についての解説は見当たらない。

また、出典として引用する『荀子』の原文については、概ね宋本の「青取之於藍」を採用しているが、ではなぜ「青取之於藍」から「青出于藍」という表現に転じたのかについての説明は見られない。

このように、中国の辞典類は、肝心の点について疑問を残すものの、全体としては、『荀子』勧学篇の原義、李謐伝に代表される転義の存在を読者に明示しており、「出藍」の複雑な来歴を一応示唆するものとなっている。

これに対して、日本の辞典類には、やや問題点が多いと思われる。そこで、代表的な故事成語辞典を中心に、「出藍」の解説状況を表5にまとめてみる。[32]

先ず見出し語は、中国の場合とは異なり、「青は藍より出でて藍より青し」と「出藍」とに大別される。この内、「青は藍より出でて藍より青し」は歴代類書の引用文に見られた「青出於藍而青於藍」を訓読した

ものである。また、「出藍」は類書の見出し語にも見られた「青出於藍」「出藍更青」「青出藍」の一部を取り出したものであり、先述の如く、既に詩文の中にも「出藍」という熟語としての用例が存在していた。しかし、いずれの場合にも、『荀子』の原文には存在しない「出」という文字がなぜ見出し語の一部となっているのか、疑問を抱く読者もあるであろう。

次に、意味解説であるが、これを表5ではＡＢＣの記号によって分類した。Ａは、原義（『荀子』勧学篇の原義）と転義（弟子が師より勝るという意味）を併記するもの、Ｂは、その二つの意味を併記するが、どちらが原義・転義かの説明はないもの、Ｃは、転義のみを記すもの、である。表から明らかなように、日本の辞典類では、Ｃの転義のみを記すものが多い。こうした辞典では、原義・転義の存在自体が読者には伝わらず、これが古来唯一の意味であったと誤解される可能性もあるであろう。

また、その意味解説に関連する出典については、◎○の記号によって示した。◎は、『荀子』勧学篇および他の文献（『北史』李謐伝等）を出典として提示するもの、○は、『荀子』勧学篇のみを出典として提示するものである。これは圧倒的に、○の『荀子』勧学篇のみを出典として

表5　故事成語辞典（日本）と「出藍」

・意味　Ａ　原義（『荀子』勧学篇の原義）と転義（弟子が師より勝るという意味）を併記するもの
　　Ｂ　二つの意味を併記するもの（どちらが原義・転義かの説明はない）
　　Ｃ　弟子が師より勝るという意味（転義）のみを記すもの
・出典　◎　『荀子』勧学篇および他の文献（『北史』李謐伝等）を出典として提示するもの
　　○　『荀子』勧学篇を出典として提示するもの
・引用　出　「青出於藍」「青出藍」「青出之於藍」など『荀子』の本文を「出」に作るもの
　　取　『荀子』の本文を「青取之於藍」に作るもの

辞典名	見出し語	意味	出典	引用
① 増修故事成語大辞典	青ハ藍ヨリ出デテ藍ヨリモ青シ	Ｃ	○	出
② 故事熟語大辞典	出藍	Ｃ	◎	出

③ 故事ことわざ辞典	青は藍より出でて藍より青し	C	○	取
④ 故事成語ことわざ事典	出藍の誉（出藍之誉）	C	○	出
⑤ 中国故事名言辞典	青は藍より出でて藍より青し	A	◎	出
⑥ 中国名言辞典	青はこれを藍より出して藍より青し、 氷は水これを為して水より寒し	C	○	出（取）
⑦ 中国故事名言辞典	青は藍より出でて藍より青し	C	○	出
⑧ 故事俗信ことわざ大辞典	青は藍より出でて藍より青し	C	○	出
	出藍	C	○	出
⑨ 故事成語名言大辞典	青は藍より出でて、藍よりも青し	B	◎	取
	出藍	C	○	出
⑩ 四字熟語・成句辞典	出藍之誉	C	○	取
⑪ 中国故事成語辞典	青は藍より出でて藍より青し	A	○	取（出）
⑫ 成語林	青は藍より出でて藍より青し	A	○	取
⑬ 中国故事成語大辞典	青は藍より出ず　青出於藍	B	○	取
⑭ 字源	出藍	C	○	出
⑮ 大漢和辞典	青出於藍　青出於藍而青於藍	B	◎	取
	出藍	C	◎	取（出）
⑯ 新訂大言海	出藍	B	◎	出
⑰ 日本国語大辞典	青は藍より出でて藍より青し	C	○	出
	出藍	C	○	取
⑱ 広辞苑	青は藍より出でて藍より青し	C	○	×
	出藍	C	○	×

提示するものが多いが、そうすると、意味解説との整合性に大きな問題が生じてくることとなる。何故なら、出典が○でありながら、意味解説がCのものは、『荀子』勧学篇の原義自体が「弟子が師に勝る」という意味である、と説いている印象を読者に与えるからである。表5ではこの組み合わせが十四もある。Cと○との組み合わせを持つ辞典は、明らかに、出典と意味解説とが合致していない、或いは両者の関係の説明が不十分であると言えるであろう。

次に、出典として提示される『荀子』の引用文についても問題がある。表5では、出典として引用される『荀子』の原文を、「青出於藍」「青出藍」「青出之於藍」など「出」に作るものを「出」の記号で、また「青取之於藍」に作るものを「取」の記号で表した。通常、『荀子』の本文として通行しているのは宋本の「取」の方であり、「出」を採用する場合には、厳密に言えば、何等かの説明を要する筈である。ところが、②『故事熟語大辞典』が王念孫の説を基に『荀子』の原文を「青出於藍」に作る旨を記している以外は、ほとんど無条件に「出」に作っている。むろんこれは、見出し語の「青は藍より出でて藍より青し」や「出藍」にとっては好都合であるが、原文の引用として提示するにしては、やや厳密さを欠いていると言わざるを得ない。

一方、引用文を宋本に基づいて「取」と表記する③『故事ことわざ辞典』、⑩『四字熟語・成句辞典』、⑫『成語林－故事ことわざ慣用句』、⑬『中国故事成語大辞典』などにも、今度は逆の問題が指摘し得る。つまり、出典の記載が「青取之於藍」なのであれば、なぜ成語の表現が「出藍」や「青は藍より出でて……」となったのであろうか。こうした点について疑問を持つ読者は少なくないと思われるが、その点について、「取」と表記した上で更に元刻本の「出」の存在を指摘し、成語の表現の由来を一応解説しているのは、⑪『中国故事成語辞典』と⑮『大漢和辞典』のみである。[33]

また、この他にも、引用文に纏わる問題点は多い。例えば、⑦『中国故事名言辞典』のように、見出し語に併記されている原文「青出於藍而青於藍」と出典解説の中での訓読「青ハコレヲ藍ヨリ取リテ、藍ヨリ青シ」とが合致していないもの、⑧『故事俗信ことわざ大辞典』の「青出之藍」や⑭『字源』の「青出于藍」のように、引用されている『荀子』の原文が宋本とも元刻本とも異なり何に基づくか不明のもの、⑨『故事成語名言大辞典』（鎌田正・米山寅太郎、大修館書店、一九八八年）や⑰『日本国語大辞典』のように、同一辞典内の見出し語「青は藍より出でて藍より青し」と「出藍」とで、その引用文の表記が一方では「出」、一方では「取」と異なるものなど、引用文と見出し語、引用文と意味解説、引用文相互の矛盾など多くの問題が存在する。

更に、中国の辞典には見られなかった問題点として、「出藍の誉れ」がある。これは⑩『四字熟語・成句辞典』が「出藍之誉」という見出し語を立てるほど、日本ではよく使用される成語であり、他の辞典でもこれを「参考」や「同義語」として取り上げる場合が多い。しかし、これについて、その表現の成立や用例を提示している辞典は見られない。これらの辞典では、一方では、出典として『荀子』を掲げておきながら、「出藍の誉れ」を同義として示すのであるから、あたかも、『荀子』自体に「出藍の誉れ」という意味や表現が存在するかのような印象を読者に与えている。

しかし、「出藍の誉れ」は「勧学」章の原義が師弟関係の逆転という

意味に大きく転じ、「出藍」という表現のまとまりが成立した後、更にその意を強調する文脈の中で、「誉れ」を付加して成立したものと考えられる。従って、先に検討した詩文の用例の中でも、「出藍之誉」は、漸く金の元好問の文の中に見えていた。そうした来歴を無視して、「出藍の誉れ」と『荀子』とを直結させるのは余りに短絡的であると言えよう。

但し、逆に、中国の辞典には見られなかった特長も存在する。日本の辞典では、⑯『新訂大言海』など、類義語として「出色」という例を挙げる場合があるが、これは中国の辞典には見られない重要な指摘であると思われる。先に詩文の用例を検討した際に、その第五の例として、同類の他のものよりも優れるという意味での使用例を取り上げたが、それは正に「出色」という意味に他ならない。前稿（二）で指摘したように、「沈魚落雁」は「閉月羞花」という成語と共鳴現象を生ずることによって、その意味と表現とを最終的に固定したと推測されたが、この「出藍」についても、表現上類似した「出色」との共鳴が、その表現と意味との固定に一役買っている可能性を指摘し得るのである。

しかし、こうした点については確かに示唆的であると言えるものの、残念ながらそのことを明示している訳ではなく、また、やはり前記のような種々の問題点は覆い難いものがある。

以上、日本の辞典類を検討してきたが、総じて中国の辞典よりも多くの問題点を抱えていることが明らかとなった。もっとも、これら辞典類では、学術論文の文章とは異なり、担当者が限られた紙幅の中で止むを得ず簡略に記載するなど、多くの制約を伴う場合も多いであろう。また、膨大な辞典を一人あるいは少数の執筆者で完成させるのは甚だ困難でもあり、どうしても多数の分担執筆とならざるを得ない。その結果、全体としての整合性・体系性などに問題を残すのはむしろ当然の現象なのかもしれない。こうした点を考慮すれば、そもそも、こうした辞典類を分析の対象とすること自体に無理があるとも言える。しかし、筆者が敢えてこれらを俎上に載せたのは、現代の辞典類の抱える諸問題が、先に検討した類書や故事成語辞典的類書の記載にその淵源を持つと思われたからに他ならない。

歴代の類書では、概ね「青出於藍」を『荀子』の原文として提示し、また「学不可以已」という勧学篇の主題を表す一句を欠落させていた。またこの『荀子』の一節を「師生」の部に分類する場合もあった。このことが既に「出藍」成立の素地を提供し、読者の読みに微妙な影響を与えていた訳であるが、更に『故事必読成語考』など故事成語辞典的類書では、「青出於藍」を『荀子』の原文として提示した上で、その意味を「弟子が師より勝る」と逐語的に解説していた。こうした類書と「出藍」との歴史は、出典は『荀子』勧学篇でありながら、その意味は「弟子が師より勝る」であるという、出典と意味解説との矛盾を醸成し、原文の「取」ではなく、「出」を構成要素に含む成語を誕生させたのである。

類書などとは全く無縁に見える現代の辞典類も、実は、こうした類書の陰影を今なお引き摺っているのである。

結　語

本稿では、「出藍」の成立を手掛かりとして、類書と成語との関わりについて考察を加えてきた。既に検討した「杞憂」「沈魚落雁」の例で

も明らかなように、成語の成立については、従来、著名な文献中の用例や高名な文人の詩文の用例のみがとかく注目されがちであった。しかし、古典の意味や表現が変容しつつ成語として確立して行く過程には、より広範な読書人の「読み」の関与をも想定する必要があると思われる。

「出藍」についても、これまで、その転義の契機は『北史』李謐伝にあり、表現の起源は元刻本『荀子』にあるとされてきた。しかし、李謐伝や元刻本の登場する遥か以前から、『荀子』勧学篇「勧学」章は、類書というテキスト上で静かな変容を遂げつつ読者に提供され続けていたのである。また、それにも関わらず、「出藍」の典拠は著名な儒家の文献『荀子』の、その巻頭に位置していたため、原義の変容はそれほど容易には進展せず、他の詩文の用例でも、特に李謐伝のような意味が唯一の意味として固定的に使用されていた訳ではない。

こうした状況の中で、類書自身が読者の要求に答える形で大きな変容を遂げ、更に広範な読者層を対象に、新たな読みを提供して行った。『書言故事大全』『故事必読成語考』のような故事成語辞典的類書の登場がそれである。これらのテキストは、古典の名言名句を引用しつつ、編者自らがその意味を逐語的に解説していく点に特徴があった。それは、類書や詩文の用例が徐々に醸成してきた意味・表現の変容の過程に、決定的な影響を与えるものであったと言えよう。こうして、「出藍」は『荀子』勧学篇の原義から乖離し、専ら、弟子が師より勝るという意味で使用されるようになったのである。

このように、類書と成語との関わりは、成語個々の持つ事情によって様々であるとは言え、成語の成立過程に、これまでほとんど注目されなかった類書の存在が関与していることは、やはり確実のようである。[34]

類書というテキストは、「韋編三絶」「読書百徧」式の読書以外にも、多様な古典の読みが存在していたことを明らかにし、またそうした読書と読者とが成語の確立に深く関与していたことを示唆しているのである。

注

（1）拙稿「類書と成語―「杞憂」の成立をめぐって―」（『島根大学教育学部附属教育実践研究指導センター紀要』第三号、一九九三年）、「類書と成語（二）―「沈魚落雁」の成立をめぐって―」（島根大学教育学部国文学会編『国語教育論叢』第四号、一九九四年）。なお、以下では便宜上、前者を前稿（一）、後者を前稿（二）と略称する。

（2）原文は、「以喩学則才過其本性也」。以下、原文については、必要に応じて注記する。

（3）なお、『北史』は、魏から隋までの北朝四代の歴史を唐の李延寿が編纂したものであるが、李謐伝のこの記事は既に『魏書』（北斉・魏収）にも記載されている。従って、後述のように、李謐伝の出典を『魏書』とするものもあるが、多くはこの『通俗篇』のように『北史』としている。本稿でも、李謐伝の出典については、便宜上『北史』と記載する。

（4）李謐、……少好学、博通諸経、周覧百氏。初師事小学博士孔璠。数年後、璠還就謐請業。同門生為之語曰、青成藍、藍謝青、師何常、在明経。（『北史』李謐伝）

（5）また、合山究『故事成語』（講談社現代新書、一九九一年）は、主要な成語の成立について分かりやすく解説するが、この「出藍」の転義については、この李謐伝の存在を指摘した上で、「すでにこのころには、……弟子が師よりもすぐれるという意でもちいられていたことがわかる。あるい

は、この李謐伝からそのような意味でもちいられるようになったかもしれない」と説く。

(6) 例えば、金谷治『荀子』(岩波文庫、一九六一年)は、「元刻本には「青出之藍」とあって、『困学紀聞』十に引かれた建本と同じである。いわゆる「出藍の誉れ」の語はここにもとづく」と述べる。また、辞典類の記載については本稿第五章で後述する。

(7) 今以涅染緇則黒於涅、以藍染青則青於藍。涅非緇也、青非藍也、茲雖遇其母而無能復化已。是何則、以諭其転而益薄也。何況夫未始有涅藍増化之者乎。(『淮南子』俶真訓)

(8) 君子曰、学不可以已。青取之於藍而青於藍、冰水為之而寒於水。(『大戴礼記』勧学篇)

(9) 伝曰、青采出於藍、而質青於藍者、教使然也。(『史記』三王世家)

(10) 性情未鍊、則神明不発。譬諸金木、金性苞水、水性藏火。故鍊金則水出、鑽木而火生。人能務學鑽鍊其性、則木慧發矣。青出於藍而青於藍、染使然也。氷生於水而冷於水、寒使然也。鏡出於金而明於金。瑩使然也。戎夷之子、生而同聲、長而異語、教使然也。(『新論』崇学篇)

(11) 青出於藍而勝於藍、染使然也(『劉子』崇学篇)

(12) 各有師資、遞相倣效、或自開戸牖、或未及門墻、或青出於藍、或冰寒於水、似類之間、精粗有別。(『歴代名画記』巻二、叙師資伝授南北時代)

(13) 東坡盖学徐浩書、山谷(黄庭堅)盖学沈傳師書、皆青過於藍者。然二公深諱之。(『苕渓漁隠叢話後集』「山谷」)

(14) 廉布……畫山水、尤工枯木叢竹、奇石松柏、本學東坡、青出于藍。(『図絵宝鑑』巻四、宋南渡後」)

(15) 少日學詩于朱巨觀、學書于任君謨、遂有出藍之譽。(『中州集』巻五、密国公璹)

(16) 但しこれらは、弟子が元の師を越えるほどに上達したという意味で使用されており、李謐伝のように、元の師が直接弟子に教えを請うというような具体的な師弟の立場の逆転を表しているのではない。

(17) 徳璋生於封谿、而文爲彫飾、青於藍矣。(『詩品』)

(18) 誰道衆賢能継体、須知箇箇出於藍。(包何「相里使君第七男生日」)

(19) 賦者、古詩之流也、始草創於荀宋、漸恢張於賈馬、氷生乎水、初變本於典墳、青出於藍、復増華於風雅、而後諧四聲、祛八病、信斯文之美者。(『白氏長慶集』巻二十一)

(20) 天覺出藍之作、本以爲公家寶、而公乃輕以與人。(蘇軾「与朱康叔書」)

(21) 李耆卿謂公之五代史、比順宗實録有出藍之色、似矣。(『丹鉛雑録』五代史学史記)

(22) これら同類のものより優れるという意味は、「出色」とも関係があるように思われる。この点については、本稿第五章参照。

(23) なお、この他、明・林茂桂の『南北朝新語』には、李謐伝の用例を巻二「学問」の部に採録している。後述のように、李謐伝を典拠として採録する類書では、概ねそれを「師弟」の部に分類するのが通常であるが、この文献は、李謐伝を採録しながらも、その意味を、師弟関係ではなく学問と位置付ける点に特色があると言える。但し、『南北朝新語』には「師弟」の項目はなく、本来「師弟」に分類すべきこの資料をやむなく「学問」の部に分類しているという可能性もある。また、用例の冒頭に紹介した『淮南子』の例は、①から⑤までのいずれにも該当せず、唯一悪い意味で使用している点に特色があった。

(24) この詳細については、前稿(一)参照。

（25）この詳細については、前稿（二）参照。

（26）類書の定義については、前稿（一）に示した通り、取り敢えず「世界」「分類」「引用」という三大要素を基礎的条件として考えたい。但し、前稿（一）（二）同様、この定義には抵触するが、『韻府群玉』『佩文韻府』も参考として取り上げる。また、類書の性格も時代によって自ずから変化しており、その点については、本稿第四章で後述する。なお、各類書のテキストについては、原則として文淵閣四庫全書本を使用する。

（27）この『書言故事大全』について、長澤規矩也「和刻本類書集成解題」（『著作集』第十巻、汲古書院、一九八七年）は、「原編者が宋の胡氏であることを初め、編修については疑わしいことが多い」とする。また、「この種の故事集中、江戸時代に最も広く行なわれた書であり、明末にも度々出版された」と説く。

（28）底本には、『和刻本類書集成』（汲古書院、一九七七年）所収本『新鐫詳解丘瓊山故事必読成語考』二巻を使用する。

（29）なお、京都大学人文科学研究所蔵『新鐫詳解丘瓊山故事必読成語考』一巻（師生）は、この四句に該当する部分を「青出于藍而寒于水、比學生過于先生」の二句に作る。

（30）因みに『意林』は、『荀子』の中から約二十条を採録するが、その筆頭に、「青出于藍、而青于藍、冰生于水、而寒于水、君子居必擇鄉、遊必擇士、防邪僻也」と記している。

（31）各々、底本には、『和刻本類書集成』（汲古書院、一九七七年）所収本を使用する。なお、この内、『書言故事大全』は、類書集成本では、「氷生於水而寒於水」に作るが、「生於水」の上に「水為之」という書き入れ（訂正）が見える。また、京都大学人文科学研究所蔵本は、「師儒類」を「儒学類」に作る。

（32）表5に取り上げた辞典の名称、編著者、出版社、刊行年は各々次の通りである。

①『増修故事成語大辞典』（簡野道明、明治書院、一九一二年）
②『故事熟語大辞典』（池田四郎次郎、宝文館、一九一三年）
③『故事ことわざ辞典』（鈴木棠三・広田栄太郎、東京堂、一九五六年）
④『故事成語ことわざ事典』（石田博、雄山閣出版、一九七五年）
⑤『中国故事名言辞典』（岡本隆三、新人物往来社、一九七六年）
⑥『中国名言辞典』（金岡照光、東京堂出版、一九七七年）
⑦『中国故事名言辞典』（加藤常賢・水上静夫、角川書店、一九七九年）
⑧『故事俗信ことわざ大辞典』（尚学図書編、小学館、一九八二年）
⑨『故事成語名言大辞典』（鎌田正・米山寅太郎、大修館書店、一九八八年）
⑩『四字熟語・成句辞典』（竹田晃、講談社、一九九〇年）
⑪『中国故事成語辞典』（金岡照光、角川書店、一九九一年）
⑫『成語林－故事ことわざ慣用句』（尾上兼英、旺文社、一九九二年）
⑬『中国故事成語大辞典』（和泉新・佐藤保、東京堂出版、一九九二年）
⑭『字源』（簡野道明、角川書店、一九二三年）
⑮『大漢和辞典』（大修館書店、一九五五～六〇年）
⑯『新訂大言海』（大槻文彦、冨山房、一九五六年）
⑰『日本国語大辞典』（小学館、一九七二～七六年）
⑱『広辞苑』第四版（岩波書店、一九九三年）

（33）但し、先述の如く、「出」が元刻本の表記に基づくという通説については、再考の余地がある。他の詩文の用例や類書の採録状況によれば、その

起源は元刻本を遥かに遡る可能性が高いと思われる。

(34) 本稿では、類書が読書人の読みに与えた影響という方向性について特に論じたが、一方、読書人の読みや要求を類書の側がすくい上げているという逆の影響関係も当然考えられるであろう。テキストと読者とは相互に密接な関係を持つと考えられる。

[付記]

本稿は、平成六年度文部省科学研究費補助金による総合研究（A）「類書の総合的研究」（研究代表者・加地伸行）による研究成果の一部である。